

伝道の実践的側面に関する研究

―実践真宗学の視点による伝道環境の劇的変化に関する実態調査から窺う―

葛 野 洋 明

目次

はじめに

一、研究の背景

二、先行資料の詳細

二一、「大正大学調査」の詳細

二二、「全日仏調査」の詳細

二三、「大谷派調査」の詳細

三、実践真宗学の視点における実態調査

三一、「実践研究チーム調査」の詳細

三二、「実践研究チーム調査」の調査項目

三三、「実践研究チーム調査」の特色

三四、自由記述から窺う

三一五、自由記述に関する単純集計報告の分類

三一六、考察

やういふ

はじめに

実践真宗学の研究は、実際に執り行われている実践を研究課題とし、実践の現状から研究するという方向性に特徴の一つがある。

伝道の実践的側面を研究するにあたり、伝道環境が劇的に変化しているなかで、真宗各派の寺院の実態を把握するために、実践真宗学の視点による独自の実態調査を通して窺う。

一、研究の背景

二〇一九（令和元）年から猛威を振るっている、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）（以下、「新型コロナ」と略す）の影響は、二〇二一（令和三）年二月現在において、いまなお継続している。ワクチンが開発され、接種が開始されたが、いまだ国際的な危機は払拭されず、大きな影響が継続している。

この新型コロナの影響によって、伝道環境が劇的に変化させられており、いまだその影響は大きく継続している。

拙論「二〇二一」⁽¹⁾において、伝道環境の劇的变化に伴う伝道方法の可能性と課題を論じた。「客観的調査分析研究方法」による研究として、先行資料である各種調査報告を取り上げ、概要と特色を明示した。各種調査報告には各々の特色があるので「独自に調査を実施し、各調査の報告内容と関連させて詳細に検討するべき」⁽²⁾と論じた。

当論文はこれを承けて、実践真宗学の視点によって独自に実施された、実態調査の単純集計報告⁽³⁾を基に、詳しく研究する。

二、先行資料の詳細

拙論「二〇二一」において、先行資料として、既に実施され調査報告がなされた、次の三点を取り上げた。

『寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査』単純集計の結果報告⁽⁴⁾（以下、「大正大学調査」と略す）

『仏教に関する実態把握調査（二〇二〇年度臨時調査）報告書』新型コロナウイルス感染症が仏教寺院に与える影響⁽⁵⁾（以下、「全日仏調査」と略す）

『新型コロナウイルス感染症の影響下における寺院の教化活動の工夫に関する調査』⁽⁶⁾（以下、「大谷派調査」と略す）

これらの調査報告を先行資料とし、その概要と特色を明示したが、その上で独自に実施された実態調査の特色を示すため、改めて先行資料の詳細を検討したい。調査方法・回答数・調査目的を加筆し、特色を詳述する。特に、調査対象者に着目し、実践真宗学の視点によって独自に実施された、実態調査の特徴を明らかにしたい。

二一、「大正大学調査」の詳細

出典…『寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査』単純集計の結果報告⁽⁷⁾

参照URL：<https://chikouken.org/10879/>（二〇二一（令和三）年（令和三）年二月二十八日アクセス）

調査者…大正大学地域構想研究所・BSR推進センター。

調査期間…二〇二〇（令和二）年五月七日～五月一四日。

調査方法…インターネットによるWEBアンケート

調査対象者…日本国内寺院関係者

回答者数…五一九件

有効回答数…五一七件

調査目的…①葬儀等の儀礼の簡略化が進んでいたなかでの今回のコロナ禍によって、今、大きく儀礼が変容する転換点にあるかもしれないという仮設に立ち、コロナによる影響とそれへの対応を把握する。

②宗派ごとにガイドライン等が出されていますが、個々の寺院では感染予防や檀家ケアに苦慮しているのが現実だと思われまうので、現時点での実践知・経験知を集約して、それをシェアすることで各寺院に参考にしてもらう。

③同様に現時点で個々の寺院が抱える不安や課題を集約、可視化する。

④宗教者の目立つ活動、発信力のある宗教者がメディア等で取り上げられますが、檀信徒等を対象とした地味で地道な活動（不安にある人々へのメッセージ発信）こそ個々の寺院・僧侶の社会的責任としてい収集していきたい。

⑤回答者に追跡調査を実施し、今回の変化・対応、また課題が中長期的にどう変遷していくのかを追っていきたい。特色…拙論「二〇二一」にて簡略に明示したが、加えて調査対象者や調査目的に着目して特色をまとめておきたい。

調査対象者が宗派にこだわらない、日本国内の寺院関係者であった。⁽⁷⁾岡山県・徳島県・沖縄県を除く、四五の都道府県から回答があり、ほぼ全国の寺院からの回答と窺える。

所属宗派は「浄土真宗（各派）」「浄土宗（各派）」「曹洞宗」「真言宗（各派）」「日蓮宗」「臨済宗（各派）」「黄檗宗」「天台宗」「時宗」「融通念仏宗」と各宗派に所属する多様な寺院からの回答であった。また、回答者の立場を確認すると、住職・副住職・寺庭（坊守）が九五・一六％であり、ほぼ住職家の立場からの回答ということが考えられ

る。

調査目的を略述すると、①葬儀をはじめとする儀礼の変容と対応を把握する、②感染予防を檀家ケアの経験値の集約とシェア、③寺院の抱える不安や課題の集約、④寺院や僧侶の社会的責任としての地道な活動の収集、⑤追跡調査による中長期的な変遷、とまとめることができる⁽⁹⁾と考える。

二二、「全日仏調査」の詳細

出典…「仏教に関する実態把握調査（二〇二〇年度）」（公益財団法人全日本仏教会、大和証券株式会社）

参照URL：<http://www.jbf.ne.jp/activity/kouhou/tyousa2020?id=110111>（二〇二一年二月二十八日アクセス）

調査者…公益財団法人全日本仏教会 大和証券株式会社 共同調査。

調査期間…二〇二〇（令和二）年八月二一日～八月二二日。

調査方法…インターネットリサーチ

調査対象者…インターネット調査会社モニタ 二〇～七九歳の男女

回答数…六一九二件

調査目的…ウィズコロナにおける「お盆」「彼岸」や、「菩提寺」「寺院」との関わり方や、「葬儀」の考え方などを把握し、今後の寺院としての在り方・取り組みなどにおける基礎資料として活用する。

特色…拙論「二〇二一」にて簡略に明示したが、加えて調査対象者に着目して特色をまとめておきたい。

調査対象者がインターネット調査会社のモニタであり、関東地方を主としつつも日本全国の各地方からの回答⁽⁸⁾となっている。仏教や寺院との関係が多様であるので、「自身の菩提寺の有無」⁽⁹⁾「仏教関与」⁽¹⁰⁾などで実態を捉えようとしていることが窺える。寺院関係者でない方々の仏教や寺院に対する意識を知ることができる。

二二二、「大谷派調査」の詳細

出典…『新型コロナウイルス感染症の影響下における寺院の教化活動の工夫に関する調査 《単純集計結果報告》』

参照URL : <https://jodo-shinshuinfo/covid-19-survey/> (二〇二一(令和三)年二月二八日アクセス)

調査者…真宗大谷派 真宗教化センター寺院活性化支援室。

調査期間…二〇二〇(令和二)年九月四日～九月三〇日。

調査方法…封書にて依頼状と調査票を送付。回答は下記いずれかの方法。

(一) Google フォームによる回答。(二) 調査票に記入し、FAXにて送付する方法。

調査対象者…真宗大谷派全二五教区三九四カ組の組長。

回答数…三八〇件

調査目的…新型コロナウイルス感染症が拡大する状況下における寺院の教化活動で行われている様々な工夫についての事例を収集すると共に、教化の現場における新たな課題を整理し、宗派施策の検討に資する。

特色…拙論「二〇二一」にて簡略に明示したが、加えて調査対象者に着目して特色をまとめておきたい。調査対象者が宗派内の組長ということで、九六・四五%⁽¹⁾という高い回答回収率となっている。同派の国内寺院八千カ寺からすると少数に見えるが、宗派の組織としては、日本国内における宗派内の実態を把握することのできた調査と窺うことができる。

三、実践真宗学の視点における実態調査

実践真宗学の視点における実態調査として『真宗寺院における新型コロナウイルス感染症の影響についてのアンケート報告(単純集計)⁽²⁾』(以下、「実践研究チーム調査」と略す)が提示された。この調査の概要をまとめ、先行資

料と比較検討し、特色を明らかにする。

三二、「実践研究チーム調査」の詳細

出典…『真宗寺院における新型コロナウイルス感染症の影響についてのアンケート報告（単純集計）』

参照URL：<https://drive.google.com/file/d/1uV65BgRxWv9qFaT84yEUjLD24nR2C0i/view?usp=sharing>（二〇二

一（令和三）年二月二五日アクセス）

調査者…龍谷大学実践真宗学研究科 院生有志「COVID-19 影響アンケート調査研究チーム」

調査期間…二〇二〇（令和二）年二月二〇日～二〇二二（令和三）年一月三一日。

調査方法…WEB調査、Google フォームによる調査。依頼状、メール、SNS での拡散。

調査対象者…真宗各派寺院関係者。

回答数…七一〇件

有効回答数…六八九件

調査目的…真宗寺院における新型コロナウイルス感染症の影響を調査すること。

特色…龍谷大学実践真宗学研究科の院生有志が、新型コロナウイルス感染症拡大による真宗各派の寺院への影響に関して、実態を明らかにするための調査を企画した。院生有志による「COVID-19 影響アンケート調査研究チーム」が結成され、調査が実施され、単純集計報告が提示された。

三二、「実践研究チーム調査」の調査項目

「実践研究チーム調査」の調査項目を一瞥すると、A. 回答者の属性に関する設問が五問。B. 影響に関する設問

が一一問である。各設問を詳細に示すと次の通りである。

A. 回答者の属性に関する設問

設問一…寺院所在都道府県

「寺院の所在する都道府県を記入してください。」

設問二…寺院所在郵便番号

「よろしければ寺院所在地の【郵便番号】を記入してください。」

設問三…寺院の周辺地域

「寺院はどのようなところに位置していますか。」

選択肢 ・市街地 ・住宅地 ・農山漁村 ・わからない

設問四…回答者の立場

「回答者の寺院における立場を回答してください。」

選択肢 ・住職 ・坊守 ・衆徒 ・寺族 ・その他

設問五…回答者の年代

「回答者の年齢を回答してください。」

選択肢 ・二〇歳未満 ・二〇代 ・三〇代 ・四〇代 ・五〇代 ・六〇代 ・七〇歳以上

B. 影響に関する設問

設問一…影響の程度

「現在、寺院における新型コロナウイルスの影響はどの程度ですか。『まったくない』から『非常にある』の一段階で回答してください。」

一〇の一〇段階回答

設問二…影響の推移

「寺院における新型コロナウイルス感染症の影響はどのように推移していますか。」

選択肢

- ・影響がない。 ・影響があったが、その影響は小さくなってきている。
- ・影響があり、変わらない。 ・影響があり、その影響は大きくなってきている。 ・わからない。

設問三…影響

「寺院への新型コロナウイルス感染症の影響にはどのようなものがありましたか。あてはまるものすべて回答してください。」

選択肢

- ・影響はなかった。 ・寺院での法要を中止・延期した。 ・寺院でのイベント（法要以外）を中止・延期した。 ・寺院での法要の参拝者が減少した、内勤めとした。 ・年忌法要（年回）の回数が減少した。
- ・年忌法要のお参り人数が減少した。 ・月参り・盆参り等の門徒宅でのお参り（年忌以外）の回数が減少した。
- ・月参り・盆参り等の門徒宅でのお参り（年忌以外）の人数が減少した。 ・葬儀の回数が減少した。 ・葬儀の参列者が減少した。 ・通夜を行わず葬儀のみが増えた。 ・寺院法要時のお斎が出せなくなった。 ・葬儀や年忌法要時のお斎がなくなった。 ・総代会や婦人会などの会合ができなくなった。 ・門信徒との連絡、会話が増えた。 ・従来、寺院と関係が希薄であった門信徒と連絡を取るようになった。 ・門信徒宅にて、世代間の会話が増えた。 ・わからない。 ・その他。

設問四…お参り減少割合

「お参りの件数（回数）は何割程度減少しましたか。減少していない場合は〇割と回答してください。」

〇割～一〇割の一段階回答

設問五…対応

「新型コロナウイルスの影響を受けて、寺院ではどのような対応をされていますか。また、今後対応したいことはありませんか。あてはまるものすべて回答してください。」

選択肢 ・新しい生活様式（マスクの着用・手洗い等）の実践。 ・本堂・会館の消毒の設置。 ・法要や葬儀での席の距離（デイスタンス）確保。 ・法要の人数制限。 ・法話の便りなどの配布。 ・寺報等の増刊配布。 ・寺院での対応の告知。 ・電話によるおつとめ。 ・インターネットを用いた法要の中継実施。 ・インターネットを用いた年忌法要等お参りの実施。 ・インターネットを用いた法話等の配信。 ・講演台前にアクリル板などを設置した。 ・講師へマスクかフェースシールドの着用を依頼した。 ・わからない。

設問六…インターネット対応への反応

「上記の質問で、インターネットを用いた対応をされた方にうかがいます。門信徒もしくは周囲の方の反応はどのようなでしたか。「悪かった」から「良かった」の一〇段階で回答ください。」

一〇段階回答

設問七…二〇二〇年 報恩講

「二〇二〇年の報恩講法要の法要はどのように勤めましたか。あてはまるものすべてを選んでください。」

選択肢 ・従来通りの形式で勤めた。 ・法要を中止した。 ・法中の参りあいがあるが、法中の参りあいを見合わせた。 ・ご講師（法話等）を招くのを見合わせた。 ・門信徒の参拝を制限した。 ・日数もしくは座数を少なくして勤めた。 ・日数もしくは座数を増やし、一座の参拝者数を少なくした。 ・その他。

設問八…寺院収入減少割合

「新型コロナウイルス感染症の影響によって寺院の収入はどの程度減りましたか？」

〇〇一〇の一一段階回答

設問九…収束後

「新型コロナウイルス感染症が収束していったとして、感染拡大以前の寺院の状態に戻ると考えられますか。」「戻る」から「戻らない」の10段階で回答してください。」

一〇一〇の一〇段階回答

設問一〇…自由記述（伝えるべきこと）

「新型コロナウイルス感染症の影響下において、宗教者・仏教者・念仏者として伝えるべきことはどのようなことだと思われませんか。ご記入ください。」

設問一一…自由記述（所感）

「新型コロナウイルス感染症の影響について思われるところがありましたらご記入ください。」

三二二、「実践研究チーム調査」の特色

先行資料と比較しつつ、「実践研究チーム調査」の特色を示す。特に調査対象者の差異が大きく、特色が窺えるので、調査対象者に着目する。

「大正大学調査」では日本国内の仏教各派寺院を調査対象としていることから、宗派に関わらない総体的な情報が収集されている。いわゆる「日本国内における寺院」という枠組みでの調査結果として有意義な調査結果と言いうる。周知の通り、仏教には多数の宗派がある。『宗教年鑑「二〇二〇」』¹³⁾によると「文部科学大臣所轄包括宗教法人としては令和元（二〇一九）年末現在、一五六の仏教宗派が存在している」¹⁴⁾とある。大きな分類としては「天台系」「真

言系」「浄土系（浄土宗・浄土真宗・時宗・融通念仏宗など）」「禪系」「日蓮系」「奈良仏教系」「その他」と六つに分類されている。⁽¹⁵⁾ それぞれの包括宗教法人数は「天台系」二〇法人、「真言系」四四法人、「浄土系」二二法人、「禪系」二三法人、「日蓮系」三九法人、「奈良仏教系」六法人、「その他」二法人が列挙されている。この六つの分類のうち、調査対象者は五つの分類に所属する宗派からの回答となっている。

悉皆調査でないアンケート調査において、調査対象を完全に網羅することは現実的な観点からして大変困難であることは言うまでもない。そのような状況のなかで、これほど大規模にまた日本国内の四五都道府県からの回答を得ていることは、総体的に日本国内の仏教各宗派寺院関係者からの回答を得た調査であったことが窺い知れる。

しかし、日本国内には、多数の包括宗教法人があり、多くの宗派があつて、それぞれに包括関係を結んでいることが多い。同じ系統に分類されている包括宗教法人であっても、宗派が異なったり、依り所とする教義（所依の教法）によって、大きな違いがある。さらに社会的な関わり方についても、様々な多様性を持つてゐることは想像に難くない。

所依の教法が異なり、宗派が異なり、社会との関わり方にも多様性があるので、個別の寺院における影響などを窺い知ることはできない。

その意味では、所依の教法を同じくする寺院ごとを調査対象とした、調査を行う必要がある。

また、新型コロナウイルスの影響は日本国内だけではなく、世界規模において甚大な影響を与えている。日本国外にも仏教寺院が多数存在するので、日本国内外の寺院を調査対象にする必要がある。

「全日仏調査」の調査対象者は、住職や坊守（寺庭）をはじめとする寺院関係者ではなく、不特定にして多様な方々が調査対象となっている。

仏教寺院における関係性から言えば、門徒や信徒、あるいは信者と呼ばれる方々をはじめ、寺院との縁は希薄な

方々なども含まれ、世間一般から仏教寺院や僧侶がどのように見られているのかを窺い知れる調査であったと言える。また、調査対象者の抽出に関しては、インターネット調査会社モニタのなか、二〇～七九歳の男女を調査対象としており、事前調査を実施し、その結果から「得られた各性別×年代の出現率と同じになるようにウェイトバック係数をかけて集計¹⁶⁾」している。偏向性の少ない、調査対象者の抽出であることが窺い知れる。

また「菩提寺の有無」を尋ね、その差を明示しつつ分析している。菩提寺の有無と年代を視点にしつつ分析しているところに特徴があると言える。「自身の菩提寺の有無¹⁷⁾」の調査結果によると、「菩提寺はない」と「菩提寺があるかどうか知らない」を合わせた割合が、全体では四〇・九%となっている。この割合を超える年代は、二〇代では、男性が五三・六%・女性が五三・一%。三〇代では、男性が四八・五%・女性が四九・八%。四〇代では、男性が四二・九%・女性が四七・二%。五〇代では、女性が四一・一%となっている。

男女ともに二〇代が最も多く、年代が上がるにつれて減少していることが明らかにされている。

このような仏教寺院への所属意識を持つことのない方々や、仏教や寺院、また僧侶との関係が希薄な方々を調査することは、仏教寺院側からの調査では困難なことが多い。その意味では「全日仏調査」のような調査結果は、仏教寺院や僧侶への視線を真摯に受け止め、深く考慮するべき調査結果であると言える。

特に、「七. コロナ禍において寺院・僧侶に期待すること¹⁸⁾」などの調査結果は、寺院や僧侶からの視点ではなく、寺院や僧侶への視点であることから、大変重要視するべき調査結果といえる。

ただし、仏教寺院への所属意識を持つことのない方々や、仏教や寺院、また僧侶との関係が希薄な方々の意見も多く含まれているので、各寺院における所依の教法や、寺院本来の目的とは異なる意見も多いことは当然である。そのことを踏まえて、真摯に熟慮するべきと考える。

「全日仏調査」に限らず、このようなアンケート調査で得られた結果を、そのまま国内の一般的な意見として、画

一的に受け取ったり、絶対視することは注意が必要である。

また、寺院の活動やその内実などに関して、新型コロナウイルスの影響を知ることが難しいことは当然である。新型コロナウイルスの影響について、真宗各派の寺院の実態を調査するには、日本国内外の寺院関係者を調査対象とすることに意義があると考ええる。

「大谷派調査」の調査対象者は、真宗大谷派の三九四カ組の組長としており、三八〇件の回答を得ている。回収率が九四・四五%⁽¹⁹⁾となっている。宗派における宗派内を調査対象とした調査の意義が窺える。寺院数との比率では、全寺院八、六七〇カ寺の中の三八〇件なので、四・三八%⁽²⁰⁾でしかないと見える。ただし、宗派内における組長の位置付けを考慮すると、宗派内の実態を窺い知ることができると考えられる。真宗大谷派では、全国に二五の教区を設置し、その中に三九四カ組が設置されている。もちろん各教区がその地域の実態を把握していることもあるが、詳細な実態となると教区内においても、様々に異なる状況が存在することは容易に想像できる。寺院が存在する当該地域と密着し、さらに各寺院と密接な関係をもつ組長を調査対象とすることは理に適っている。

さらに詳しく実態を把握するためには、寺院関係者個人を調査対象にすることも、重要である。

「実践研究チーム調査」の調査対象者は、日本国内外の真宗各派寺院関係者となっている。実践真宗学の視点からの調査としては、まずは浄土真宗という教法を所依の教法とする寺院の実態を把握することに異論は出ないと考ええる。浄土真宗における特定の宗派や、真宗十派によって構成されている真宗教団連合のような、組織内の調査に止まらず、浄土真宗という教法を所依の教法とする寺院ということで、真宗各派の寺院を調査対象とすることは、龍谷大学実践真宗学研究科における実践真宗学の視点による、真宗各派寺院の実態調査として、正鵠を射ていると考ええる。

また、既に述べたように、新型コロナウイルスの影響は日本国内のみならず、世界的規模で劇的な影響を及ぼしている。仏教寺院は日本国外にも多数設立され、多くの仏教徒と共に運営されている。

日本国内に限らず国外の寺院関係者も調査対象とすることには大きな意義があると考えられる。ただし、日本国内と国外の寺院は、その歴史や設立の背景、また門信徒との関係や運営方法など、多くの差異がある。それ故に、画一的に結果を示すのではなく、実態を把握することや、お互いに良きアドバイスを得られるように、考慮しなければならない。

また、調査対象者を住職や坊守、また僧侶や開教使などをはじめとする寺院関係者だけではなく、寺院に所属している門徒、所属はしていないが浄土真宗に帰依し法要などのご縁持つ信徒、またその地域の住人などに広く調査することも重要と考える。もちろん調査は全てを一度に実施することはできないので、次回以降の調査の課題とすべきと考える。

以上のように、各調査の調査対象者に着目して、比較検討してきた。各調査の善し悪しを論じたのではなく、それぞれの調査の特徴を明らかにした。

今後は、これらの特徴を踏まえて、重層的また横断的な視点で分析することが必要と考える。

三十四、自由記述から窺う

「実践研究チーム調査」のB.影響に関する設問に、設問一〇…自由記述（伝えるべきこと）と、設問一一…自由記述（所感）がある。この自由記述の分類や抽出に関して、調査分析に深く関わった。自由記述の分類や顕著な特徴を示す記述の抽出を行い、詳しく分析検討して考察を加える。

設問一〇には四九三件、設問一一には三五一件の記入があった。自由記述には、様々な回答者から、多様な意見を窺うことができる。

三五、自由記述に関する単純集計報告の分類

自由記述は二つの設問があり、設問一〇では「宗教者・仏教者・念仏者として伝えるべきこと」を尋ね、設問一一では「新型コロナウイルス感染症の影響への所感」を尋ねている。しかし、記述内容を確認すると、多様な回答が、二つの設問にまたがるように記述されていた。そのため、二つの設問に記述されていた内容を総合的に捉え分類した。なお、自由記述には、一件の回答のなかにも多種多様な要素が見受けられた。それ故に分類に数えられている件数は、回答件数より多い。

「分類名」とその分類に相当する回答の件数、顕著な特徴を示す文言を抽出する。回答件数の多い順に明示すると次の様になる。

(一)「真宗の教え」一四六件。

・何があっても変わらない阿弥陀如来の救い ・阿弥陀仏の慈悲 ・仏願の生起本末 ・念仏 ・俱会一処 ・樹心弘誓仏地 ・真実信心 ・畢竟依 ・摂取不捨、誰も見捨てられないという教えこそ大事 ・後生の一大事を尋ねる。 ・いのちの行方 ・『御文章』疫病の章のおこころ ・「念仏者の生き方」でお示のおこころ ・社会状況によって伝えることが変わることの方が危険

(二)「仏教の教え」一一三件。

・諸行無常 ・四苦 ・縁起 ・世間虚仮 ・正見 ・会者定離 ・一切皆苦 ・生きて死ぬいのちを生きる ・無常などを、この状況で語ることは、きつい内容となるかもしれない。 ・諸行無常、この状況も必ず変わる

(三)「寺院活動の方法」一一三件。

・コロナを言い訳にしない ・オンライン化など、伝道方法の幅を広げる ・各種会議がオンライン化し、効率化できた ・既にオンライン配信していたので、スムーズに移行できた ・リモート仏事は離郷門信徒とのつながりを保

つのに有用 ・オンライン化と対面のハイブリッドになると思い柔軟に対応 ・門徒はより聞く機会を求めているのに、オンライン対応できない寺院が多い ・オンラインに温かさが無いという指摘がある。では温かさをどのように持たせるかを考える ・お勤めなどを一緒にできない危機感 ・同席し話しをする、対面でのコミュニケーションの大切さを痛感 ・オンライン環境や活用が困難な方に配慮する ・今、寺院を護持し、帰属されている方の気持ちに応える ・通夜、葬儀に参列できない悲しみへの対応 ・新しい試みと、戻す努力。

(四)「心に寄り添う」九二件。

・安心感を与える ・一人ひとりが孤立し疎外されることがないように思いやる ・安心して病にかかれる社会 ・他のいのちとのつながり ・困っている人を支援、相談に乗る、寄り添う ・情報共有、共に乗り切ろうという寄り添い ・自死念慮者や自死遺族への寄り添い ・皆さんの苦悩に耳を傾け、どう乗り越えていくべきかを仏法に聞き、共に考えていく。 ・門信徒の心に寄り添う ・お寺と門信徒の絆 ・具体的サポートを、お寺としてどこまで、どのように行うか考えさせられる ・不安に対し、阿弥陀如来の慈悲というブレない心の拠り処を確認してもらい、力強い指針を示す必要が宗教者としてある。

(五)「平生からの教え」七三件。

・いのちのつながり ・いのちの儚さ ・いのちの尊さ ・いのちの大切さ ・いのちのあり方 ・生きる意味 ・いのちへのまなざし ・今ここでの救い ・不安だからこそ、安心できる教え、安心できる場所 ・丁寧な法務 ・驚き恐れることにあらず、生死の問題は常に内包されている ・コロナ影響下だからと伝えるべきことは変わらない

(六)「寺院運営」六七件。

・大切に相続してきたお寺のあり方が、コロナ後に果たして戻れるのか、通用するの心配 ・寺院の抱えていた諸

問題が一気に顕在化した ・ お寺離れが一気に加速する ・ 帰属意識が希薄となり、その場限りのご縁が増えた
 ・ 影響が多にあった。今後の護持運営方法やお寺のあり方を考え直す ・ 寺院経営の方策を考えていかないと、生き残れない ・ 以前のように戻らないと思う ・ こういう時こそ内部の変革のチャンス。変化に対応しなければ残れない ・ 子ども会などの行事ができず、次世代教化ができないの大きな問題 ・ 葬儀が家族葬や直葬が広まっていたのが、拍車がかかる ・ 一律対応は困難 ・ クラスタが発生した時の保障問題を考える。

(七)「気づき・ありがたさ」五七件。

・「あたりまえ」の日常が、実は「おかげさま」で「ありがたい」日常であった ・ 人との「つながり」のありがたさ。それを支えてくださる仏様の「ご縁」の教えのありがたさ ・ 目に見えない巨大な恐怖を感じていますが、現実を受け止めつつ ・ 他者を非難する心があることに、気づかせて頂くことで、思いやりの心が育まれる ・ 今こそ宗教の役割は大きいと思う ・ 「お参りください」と言っている、寺院が本当に参りやすい環境を整えているか、足下からの改善を考える ・ エッセンシャルワーカーとしての法務を考える ・ 葬儀や法事を執り行えない時など、本当に言葉を選ばなければならない ・ どのような状況であっても変わることのない「浄土真宗というみ教え」を大切に
 するのが、寺院・僧侶の存在意義と思う ・ 僧侶自身が教えを自信をもって取り次でできなくなってしまうのは、コロナ影響以前からの問題。

(八)「ハラスメント抑制」五四件。

・ 差別や排除を生み出さない ・ 病苦は他人事ではない ・ ハンセン病のような、無知による差別を生み出さない
 ・ コロナによる恐怖や不安からくる差別や、他者への不信任をもたない ・ 感染者差別への対応と同調圧力への注意は怠らないよう ・ 差別や偏見の感染へとつながる、負の連鎖にいたらないよう ・ 誰もががかかるかも知れないコロナウイルス感染症、お互いに相手の気持ちになって行動、対応する

(九)「感染拡大防止」三八件。

・お参りに来られる方には、一番近い寺院側も周知して、お互い気をつけあって、感染を広げないよう
「正しく理解し、正しく恐れる」・寺院内外での感染予防を徹底し、互いに安心できるつきあいを・一人として対策をきっちりして、安心してもらえるよう努める・僧侶の感染症に対する危機感が希薄・高齢者が多いので、感染防止が最優先・終息を願うとともに、今なすべき自らの行動を常に考える

(一〇)「世間の影響」二四件。

・マスコミやインターネットに振り回されないように。むしろ今こそお寺が落ち着けることを伝えたい・メディア情報に一喜一憂せず、変わらない真実をたよりとする・デマに迷わされない・コロナウィルスに対する正しい情報と正しい行動。その正しいとはどういうことを伝える・憶測で判断せず、冷静に考えて行動することを心がける。
・経済に左右されない・影響を受けざるを得ない社会的側面と、影響を受けてはならない心理的側面があること
・情報に影響されて「正しさ」に迷う。正しさで人を切り捨てている自分を考える

(一一)「宗派への意見」一二件。

・法式にかかる情報(マスク着用、消毒すれば実施可など)を教えてほしかった・新しい法要様式(リモート法要など)が求められるようになった。具体的実施方法が分からないのが現状。公式マニュアルや、講座を開催してほしい・感染症に関する認識が甘いように思うので、一律のガイドラインなどが欲しい・宗門、教区、組単位での従来の取り組み方を見直す・人材育成の新体制を先送りにして欲しい・本山、別院は一般寺院とは異なるので、行事をなんとか実施してほしかった・参拝を控えるアナウンスはやめて欲しい。

三二六、考察

(一)「真宗の教え」においては、浄土真宗という教法の根本的なことに言及されていることが多かった。いのちの危機を感じる状況であるからこそ、究極的関心に対する、究極的解決を明示することが強調されていたといえよう。またその救いに遇うことを得た念仏者の生き方についても言及されていた。特に、社会の状況にに応じて、伝える内容が変わることへの危惧は、大きな意味を持つと考ええる。仏教は迷いの世間から分離して、悟りを開くことに本質がある。それは世間と全く乖離している訳ではない。しかし、現実の社会の影響に振り回され、伝える内容が変わってしまったのは、仏教の本質は失われてしまう。浄土真宗という教法の純粋性を保ちつつ、対応していかなければならないことが示唆された。

(二)「仏教の教え」においては、仏教の視点による、迷いの世界に対する人間観や世界観について言及されていた。罹患者数が増加し、死亡者数も増え続けているなかで、いかに真実であっても、当事者にとっては受け取ることが「きつい」ことがあるという指摘は、心しなければならぬ。伝える内容は同じであっても、時や場所、対象者の状況などを配慮して、伝える言葉、方法に工夫を凝らし配慮しなければならない。それによってこそ同じ内容が伝わる。伝道に関する大きな示唆が与えられた。

(三)「寺院活動の方法」においては、寺院活動への危惧や方法に関する文言が抽出された。特にオンライン化が進むことで、新しい方法が試みられていることが窺えた。国外の寺院などでは、寺院関係者のそれぞれが遠距離であっても、既にオンラインを用いていたので、スムーズにオンライン化が拡充しているという情報は、オンライン化を試みながら、ハードルの高さを痛感している者にとって、力強いアドバイスと受け取ることができる。オンライン化に対するマイナスイ面にも言及されており、「新しい試みと、戻す努力」という両面への思考が重要であることは重要視するべきであろう。

(四)「心に寄り添う」においては、新型コロナウイルスの影響から不安を抱かざるを得ないなか、心の安らぎ・寄り添い・つながり・不安への寄り添いなどに多くの言及があった。「全日仏調査」においても、寺院や僧侶に期待されていることの最上位となっていた。「阿弥陀如来の慈悲というブレない心の拠り処」という文言は、医療や福祉における寄り添いとは一線を画した、浄土真宗の僧侶としての寄り添いを示唆していると考えられる。

(五)「平生からの教え」においては、病苦や死苦、愛別離苦や求不得苦などが顕著に感じられる状況のなか、「伝えるべきことは変わらない」「生死の問題は常に内包されている」という文言に着目したい。平生の伝道における内容を、改めて考えさせられる文言である。

(六)「寺院運営」においては、寺院運営を危惧する文言が抽出された。しかし新型コロナウイルスの影響によるものではなく、寺院の抱えていた潜在的な課題であるという指摘もある。また、この状況下における変革を志すことも指摘されている。各寺院の状況が異なるので、一律的な対応は困難という指摘は重視しなければならないと考える。

(七)「気づき・ありがたさ」においては、日常が「有り難く」「おかげさま」と感じる文言が多く抽出された。この非日常的な状況であるからこそ宗教の役割が大きいという指摘は重要であろう。もちろん、ここでも「変わることはない」「浄土真宗というみ教え」を大切にする」べきという指摘は最重要と考える。

(八)「ハラスメント抑制」において、多くの回答があつたように、罹患者や病苦に苦悩する方、また医療に従事される方への差別や偏見を生み出すなどあつてはならないことである。同調圧力や無知によつて差別を生み出さないように最大限の努力が必要である。「ハンセン病のような差別を生み出さない」という文言は、仏教の僧侶として、肝に銘じなければならないと、反省とともに痛感させられた一言である。

(九)「感染拡大防止」においては、新型コロナウイルス感染拡大防止の意識を高く維持するべき文言が抽出された。アンケートの設問に対する回答においても、密集・密閉・密接を避け、消毒や換気、距離の保持など新しい生活様式

に関する対応は、定着していることが窺えた。参拝者に高齢者が多いことや、宗教法人としての責任という面からも細心の注意が必要であることが指摘されていた。

(一〇)「世間の影響」においては、情報・メディア・政府・世間に振り回されないようにという文言が多く抽出された。「正しい情報と正しい行動。その正しいとはどういうことか」「影響を受けてはいけない心理的側面がある」という文言は、宗教者が担う大きな役割を示唆していると考えられる。

(一一)「宗派への意見」においては、マニユアルやガイドラインを示してもらいたい。あるいはモデルとして率先してもらいたいという要望が多く抽出された。新型コロナウイルスの影響が長引き、寺院活動などを何とか実施させたいという思いから、必然的に出てくる要望と考えられる。確かにガイドラインなどの情報があることに越したことはない。ただしマニユアルということは、熟考しなければならない。なぜなら寺院や僧侶の実践は一樣ではなく、それぞれの状況のなかで、当事者が考慮し判断することが多いからである。またオンライン化などの方法の多様化について、マニユアルを示しても各実践に応答し得ないことが多い。マニユアルよりもサポートを受けられる相談窓口などの充実が期待される。

以上、自由記述の回答を分類し、抽出された文言について考察しコメントを付した。この程度で十全な分析とはとても言い得ないが、重要と考えられること、示唆を受けたことを明示することはできたと考える。

おわりに

「実践研究チーム調査」は実践真宗学の視点による、独自の実態調査であった。先行資料として取り上げた各種の調査報告と比較検討して、それぞれの特徴を示した。

特に自由記述の回答に関しては、分類と文言の抽出から、コメントを付した。

「実践研究チーム調査」は単純集計報告がなされ、今後は各データによるクロス集計やテキストマイニングなどの手法をもって分析される。さらに詳しく分析された報告に期待が寄せられる。

伝道の実践的側面に関する研究における、実践真宗学の視点による伝道環境の劇的变化に関する実態調査から窺い、現時点における新型コロナウイルスの真宗各派寺院への影響の一端を明らかにすることができた。

註

- (1) 葛野洋明「伝道の実践的側面に関する研究 ―伝道環境の劇的变化に伴う伝道方法の可能性と課題―」、「真宗学」一四三・一四四、二〇二二（令和三）年。「拙論〔二〇二二〕」と略す。
- (2) 「拙論〔二〇二二〕」六五頁。
- (3) 『真宗寺院における新型コロナウイルス感染症の影響についてのアンケート報告（単純集計）』（龍谷大学大学院実践真宗学研究科院生有志「COVID-19 影響アンケート調査研究チーム」）(<https://drive.google.com/file/d/1uV65lBgRkWv9qFaT84yEUpLD24nR2C0i/view?usp=sharing>)
この調査は、龍谷大学実践真宗学研究科の院生有志が、新型コロナウイルス感染拡大による真宗各派の寺院への影響に関して、実態を明らかにするための調査を企画した。院生有志による「COVID-19 影響アンケート調査研究チーム」を結成し調査を実施した、単純集計報告である。調査を企画し実施した院生諸君、ならびに指導に携わってくださった、浄土真宗本願寺派総合研究の藤丸智雄副所長、第一一回宗勢基本調査の長岡岳澄調査研究員に深く謝意を表す。（肩書きは当時のもの）
- (4) 「大正大学調査」参照URL：<https://chikouken.org/10879/>（二〇二二（令和三）年二月二八日アクセス）
- (5) 「全日仏調査」参照URL：<http://www.jbfne.jp/activity/kouhou/tyousa2020?id=>（二〇二二（令和三）年二月二八日アクセス）
- (6) 「大谷派調査」参照URL：<https://jodo-shinshuinfo/covid-19-survey/>（二〇二二（令和三）年二月二八日アクセス）
- (7) 「大正大学調査」三頁。

- (8) 「全日仏調査」三頁。
- (9) 「全日仏調査」四頁。
- (10) 「全日仏調査」五頁。
- (11) 「大谷派調査」五頁。
- (12) 「真宗寺院における新型コロナウイルス感染症の影響についてのアンケート報告（単純集計）」（龍谷大学大学院実践真宗学研究科院生有志「COVID-19 影響アンケート調査研究チーム」）(<https://drive.google.com/file/d/1uV65JBgRxWv9qFaT84yEUpLD24nR2COI/view?usp=sharing>)（二〇二一年二月二五日アクセス）
- (13) 「宗教年鑑 令和二年版」文化庁、二〇二〇（令和二）年二月二八日発行（「宗教年鑑」二〇二〇」と略す。）参照
URL：文化庁（https://www.bunka.go.jp/tokel_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/index.html）（二〇二一年（令和三）年二月二八日アクセス）
- (14) 「宗教年鑑」二〇二〇」八頁。
- (15) 「宗教年鑑」二〇二〇」『文部科学大臣所轄包括宗教法人一覧』一一〇—一一九頁。
- (16) 「全日仏調査」二頁。
- (17) 「全日仏調査」四頁。
- (18) 「全日仏調査」三六—三七頁。
- (19) 「大谷派調査」五頁。
- (20) 「大谷派調査」三頁。

キーワード 新型コロナナ、伝道環境の劇的変化、実態調査

※当論文は「本願寺派教学助成財団教学研究資金助成」を受けた研究成果の一部である。ここに記して謝意を表す。